



書評

《シリーズ・高次脳機能の教室》

記憶障害の診かた

河村 満 シリーズ編集

石原 健司 著

認知症の理解にも役立つ、記憶障害を楽しく学べる 1 冊

〔評者〕 池田 学 阪大大学院教授・精神医学

本書は《シリーズ・高次脳機能の教室》のトップバッターとして出版された。本シリーズはこれから高次脳機能/神経心理学を学ぼうとする人たちを対象としているので、記憶・記憶障害のエッセンスが、この分野のエキスパートである著者のわかりやすい文章と美しい図表で優しく語られている。しかし、内容は深い。経験豊富な認知症にかかわる多くの職種の方々にも、手元に置いて繰り返し読んでいただきたい内容である。

私が神経心理学を学び始めた1990年前後は、神経心理学の研究対象が失語、失行、失認などから記憶、情動、いわゆる前頭葉症状へと拡大しつつあった時期であった。エピソード記憶の障害を学ぼうとすれば、自然に目の前のアルツハイマー病の患者さんに引きつけられた。本

書でも紹介されている語義失語を意味記憶障害、意味性認知症の視点から再評価した師匠の田邊敬貴先生の仕事にもかかわることができた。そして、認知症の人の生活支援を考えると、保たれている手続き記憶の活用が欠かせなかった。当時は、まだまだ神経心理学をベースにした認知症の研究者は少なかったが、自然に認知症の研究や診療に進むことができたのは、本書のテーマである記憶障害の診かたをある程度身につけていたおかげであると思っている。本シリーズの編集者である河村満先生が冒頭で述べられているように、高次脳機能の診かたがわかると、認知症の症状を具体的に理解することができるようになり、患者さんや家族が何に困っているのか、どうすれば満足のいく生活をするかまで考えられるようになると思

われる。

当時は、本書で紹介されているSquireによる記憶の分類やTulvingの記憶の分類の原著を懸命に読みあさる毎日で、Squireの『Memory and Brain』という単行本の日本語訳『記憶と脳』が河内十郎先生の訳で医学書院から出版された時のうれしさは今でもはっきり覚えている(情動を伴うエピソード記憶かもしれない)。その後のさまざまな研究成果を加えた上で、症例検討では学んだ記憶障害の評価と解釈、実臨床での活用が体験できるように工夫し、各章の目標とまとめ、確認のためのQ&Aまで懇切丁寧にわれわれが楽しく学べる本書を出版してくださった著者に感謝したい。

A5判・頁192 2025年5月
定価：3,850円(本体3,500円+税10%)
[ISBN978-4-260-06030-1] 医学書院刊

